
ローレライの呪歌（まがうた）

aqua

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローレライの呪歌^{まがうた}

【Nコード】

N4186Q

【作者名】

aqua

【あらすじ】

広大な空を自由に駆け巡る幻獣、神にも等しい強大な魔力を持った古代帝国の姫宮、世界を支える天に届くほどの塔、一夜にして海中に没した大陸……歴史の中に埋もれ、今となっては真偽を確かめる術もない逸話の数々。それらはすべて伝説となって久しい。

だが……『央都』と呼ばれる小さな島国にはそんな伝説の痕跡が今も確かに残っている。現在、『央都』を治めるのは16歳の少女王。彼女の波乱に満ちた(?)毎日とそれに振り回される側近達の波乱

万丈な日々の様子。逆ハ―風味です。

この世界は、かつて空に浮かぶ幾つもの浮島から成り、魔導によって続けられていたという。

だが、魔力を持つ子供が生まれにくくなった現在、魔術も魔法も科学と融合しその在り様を変えつつある。

ましてや、島を空に浮かべるような大掛かりな魔導は既に失われて久しい。

広大な空を自由に駆け巡る幻獣、神にも等しい強大な魔力を持った古代帝国の姫宮、世界を支える天に届くほどの塔、一夜にして海中に没した大陸……歴史の中に埋もれ、今となっては真偽を確かめる術もない逸話の数々。

それらはすべて伝説の彼方に在る。

だが……『央都』と呼ばれる小さな島国にはそんな伝説の痕跡が今も確かに残っていた。

海の都の物語　〈ローレライの呪歌〉

『央都』^{おうと}と呼ばれるその小さな島国は、世界の中央にあるとされる。

古代帝国の首都であったとも言われるその名残は、島内に残る幾つ

かの建築物に明らかだ。

『央都』の面積は、この蓬萊最大の大国である『ローラン帝国』の首都であるフィル・エルダナとほぼ同じ。

そして、『央都』全国民を合わせてもその住人はフィル・エルダナの半分である18万人ほどであるという。

だが、東西貿易において必須の中継港である眞埜港まのを有する商業都市 雁弥かりや、古都の色彩を今も色濃く伝える魔術都市 螺樹らじ、文化、芸術の発信地と言われる王都 那瀬なせを有する『央都』の富力は大国列強と肩を並べる。

『央都』は、ありとあらゆる意味で大陸列強の垂涎の的である小国だったが、驚くべきことにこの吹けば飛ぶような小さな島国は、どのような大国の属国にも領土にもなったことがない。

『央都』の長い歴史において、大国列強に包囲された例はそれこそ枚挙に暇ないが、それらの国々が衰退し、あるいは滅んだ後も『央都』という国は依然として存在しつづけている。

『央都』の騎士団は大国の騎士団にもひけをとらぬ一騎当千と言われる当代一流の騎士ばかりだったが、幾ら一騎当千の騎士と云えども数にして数十倍する敵を屠ることは物理的に不可能である。

海の都の別名で呼ばれる『央都』を守護するのは、今や失われつつある「魔術」や「魔法」といった古い技術を操り、その血に神を潜ませると言われる聖なる王家……『皇』すうだった。



「退屈。何かおもしろいことないかな」
椅子の背に顎を乗せただらりとした体勢で、翠は小さな欠伸を漏らす。

瑯たけた面差しをしているが、翠はつい3ヶ月ほど前に16歳の誕生日を迎えたばかりの少女だ。

だがその細い双肩には、世の他の16歳の少女とは比べ物にならないずっしりと重い責任が乗っている。

なぜなら、翠は、この『央都』を統べる女王なのだ。

翠の父たる先王が崩御したのは、翠が10歳になったばかりの秋のこと。

ただ一人の子供であった翠は、3ヶ月の喪に服した後、即位した。どれほど優秀で忠誠心の厚い家臣がいても、冠する者の責任と義務は重い。

その上、現在「皇」を名乗るのは……即ち『央都』を支えるといわれる聖王家の人間は、翠ただ一人だけだった。

「だいたいさ、何で三人ともいないのかな」

翠のぼやきに侍女の玲衣レイがくすくすと笑う。

「あら、公務でしょ。自分で許可したんじゃない」

「そうだけどさ」

唇が不機嫌に尖る。

「それに誰もいないから出かけちゃダメなんて……」

「仮にも女王陛下を一人で歩かせるわけにはいかないでしょう」

「護衛はつれていくわ、ちゃんと」

私だって自分の立場くらい自覚してるもの、と頬をふくらませる。

「ダメよ。宮内長官からしつかりと念を押されているの、万が一分達が誰も王宮内にいなかったら、絶対にあんたを部屋の外に出すなってね」

玲衣ははつきりきっぱりと言い切る。

侍女というものの、乳姉妹ともなれば二人きりの時の言葉遣いは気安い。

「何それーっ。いつそんなこと決めたの？そんなの軟禁じゃない」
「そうね」

あっさりと玲衣はうなづく。

だがこの場合、女王たる翠の意向よりも、宮内長官の意向が優先する。

翠の身は、翠だけのものではない。

「だいたい、王都で……それもこの王宮内で私が危険な目にあうはずなんてないじゃない」

『央都』の民が己らの王家である「皇」に対して捧げる敬意と尊崇は他国の民のその比ではない。

『央都』の民は、己らが「皇」によって守られていることを誰よりもよく知っていたし、王宮に勤める人間は必ず一つや二つその奇跡の技を目にしているものだ。

彼らにとって、『皇』とは時として神にも等しいほど。

「そうだけど……」

「それにうちの近衛は世界一よ」

他国でならば王室の剣術師範も務められるだろうクラスの騎士がゴロゴロという。

「わかってます。別に近衛の腕を疑うわけじゃないし、警備が甘いとは言わないけど他国に比べてうちの王宮は開かれているわ。いろいろな国の人間が出入りしているし……用心に越したことはないでしょう」

「でも、賭けてもいいけど……私に刃を向けても、ケガをするのは絶対に相手のほうよ」

翠は緩やかに視線を玲衣に向け、そして、くすりと口元に笑みを刻んだ。

玲衣はその笑みにドキリとさせられる。

よく知っているはずのこの乳姉妹は、時々、玲衣の見知らぬ人間のような表情をすることがある。
それこそが「皇」の持つ特質の一面であると知りながら、未だ慣れる事ができない。

「……あんと賭けるバカはこの国にはいないわよ」
幼い頃、さんざんカモられた記憶のある玲衣は言った。

「あら、戒はまだ賭けるわよ」

「……バカ？」

玲衣は眉根をひそめて小声で問い返す。

「そんなんじゃないわ」

翠はくすくすとおかしげに笑う。

戒 カイ トウオウグウ ……東王宮 戒は、翠の従兄弟だ。

先王の妹姫が王族である東王宮家に降嫁し生まれた東王宮の嫡子である。

両親を早くに亡くした為、3歳の時から翠と一緒に王宮で育ち、単に幼馴染というより兄妹……気分としては姉弟……同然。

その上、「皇」ではなくとも王族なのだから「皇」たる翠のことは誰よりも一番良く知り尽くしているはずだった。

それなのに翠と賭けをしようなんて、玲衣に言わせれば正気の沙汰ではない。

「そんなことないわ。ただ、戒は負けず嫌いなもの」
翠はおかしそうにくすくす笑う。

「って言うか究極のバカってだけでしょ。だって、これだけ長い付き合いなら、あんたと賭けても絶対に勝てないってわかるでしょうが」

玲衣は思わず、不敬罪で牢獄にブチ込まれても文句は言えないような雑言を口にする。相手は女王を除けば最高位の大公殿下だ。

「そんなことないでしょ。私だって時々負けるもの」
例えば、この間のおやつのカレーを賭けた時とか……双六の勝負とか……と挙げる翠に玲衣は小さく溜息をつく。

「それはね、あんたが負けてもいいと思ってるからよ。あんたが本気で勝ちたいと思ったときは絶対に誰も叶わないの」
どういう理屈なのかわからないけれど、そういうことになっている。翠が「勝つ」と決めたのだったら、どんなに不可能と思われる状況でも絶対に勝つのだ。

「だって私、運がいいんだもの。運の神様がいたら絶対に私、愛されてるわ」

「あんたの場合、運が良いってレベルじゃないわよ」
愛されてるところか、溺愛されまくり骨抜きメロメロだろう。それこそ、賭けてもいいくらいだ。

「当然でしょ、翠は「皇」なんだから」

その声に玲衣は振り返り、予想通りの姿を目を留め、こっそりため息をついた。

汐^{ヤノ}埜 司^{シヨウ}耀 ……翠の幼馴染であり、汐^{ヤノ}埜宰相家の嫡子である青年が、相変らずの涼しげな美貌にかすかな笑みを加えて立っている。

(……他の子達が見たら卒倒もんね)

王宮の侍女達の人気ナンバー1、かつ、『央都』の年頃の乙女達……ただし、自己申告……の理想の王子様ナンバー1であるところの青年は、大変見目麗しい。

クールビューティーと言われ、そのそっけなさが有名な相手にこんな優しげな笑みなど見せられれば失神者が続出するだろう。

だが、翠と乳姉妹ということもあって、幼い頃から何度か顔を合わせることもあった玲衣は誰もがうっとりとするその美貌の裏の本性を知っているから、見惚れたりしている心の余裕など持ちようがない。司耀が笑っていると何か企んでるんじゃないかという警戒心の方が先に立つ。

「しよー、おかえりー」

翠がぱっと嬉しそうな表情を浮かべた。

何だかんだ文句を言っていたのも、寂しかっただけと玲衣にはわかっている。

本来、三人いる幼馴染が揃って王宮を留守にすることなどまずない。必ず誰か一人が翠の側にいるからだ。

それが暗黙のうちに定められている彼らのルールだったし、それを誰もが認めていたのだ。

「ただいま」

司耀もまたつられて嬉しそうに笑った。

彼が、翠に対する時だけ決して嘘が無い表情を浮かべるということ
を玲衣は知っていた。

「予定より早かったね」

「うん。須佐^{スサ}から緊急出動だっという連絡もらったから……ちよつ
と予定を早めた。戒はまだ帰国してないし……。報告しがてら一緒
に食事しようと思ってね」

24歳という若年でありながら、司耀は既に女王たる翠の側近とし
て宮内長官の地位を得、国政に参与している。

先週から、王都たる那瀬から馬で半日はかかる雁弥の離宮の視察に
出かけていて、本来ならば王宮に戻るのは明日の予定だった。

「じゃあ、今夜はトブサがでるね」

「だと嬉しいけどね……」

トブサというのは、司耀が好物にしている辛い漬物である。

「絶対に出るって」

司耀の人気は厨房でも絶大だ。

「楽しみにしておくよ。……ところで、須佐はなんで急に緊急出動
したの？」

一須佐……^{トウヤ} 刀箭^{スサ} 須佐 は、司耀や戒と同じく翠の幼馴染だ。

代々優秀な軍人を輩出する武門の家柄である刀箭本家の嫡子で、現
在、近衛騎士団長を拝命している。10年前に、わずか15歳で『
央都』近海を荒らした海賊団を殲滅したその武名は既に他国にまで

鳴り響いている。

彼が翠の傍らに居ると思っていたからこそ、司耀が安心して視察に出かけていたのだ。

そもそも王族の警護を任務とする近衛が……それも翠が王宮に在りながら、その絶対の守護たる騎士団長自らが出向かねばならない事件などありやしない。

「北の品田沖に船影が見えるって知らせが入ったの。どうも様子がおかしいし、もしかしたら海賊の罠とかかもしれないってことで行ってもらったの。他に人手がないというし……」

「誰から要請された？」

口調は柔らかかったが、表情はやや険しい。

「やーだ、別に何かの陰謀とか企みとかじゃないわ。要請してきたのは、將軍……須佐のお父様よ。王宮に詰めっぱなしだと身体が鈍るだろうからって」

翠はそんな司耀の考えすぎを笑い飛ばす。

「ならいいけど……。戒も俺もいない時だったから、誰かが翠を狙ったかと思ってさ」

それぞれ翠の側に仕えた時期は違うものの、側仕えである彼等はよほどのことが無い限り翠の側を離れない。

別に職務上のことがなかったとしても、彼らは翠を一人にしないということを誓っていたから、三人とも王宮にいないというのは極めて稀な事態だ。

「司耀、考えすぎ」

「仕方ないでしょ。翠のことはどれだけ心配しても足りないと思ってるよ」

幼馴染であり、仕えるべき主人であるということを忘れたことはない。

だが、それ以前に、翠は司耀の初恋の相手だった。

「……それ、暗に私がトラブルメーカーだと言ってるでしょ」

出会った頃の事を思い出すと、今でもほのかに甘く、そして切ない。どんなに考えすぎだと言われようとありとあらゆる可能性を検討し、翠の安全に心を配るのは司耀の習い性のようなものだ。

ましてや、二度目の恋も同じ相手にしているのだから……。

「そうかもね」

司耀は肩をすくめてみせる。

「言っておくけど、それ絶対に私だけのせいじゃないからね。確かに私はよくいろんなトラブルに巻き込まれるかもしれないけど……。でも、トラブルを大きくするのは須佐と戒だからね」

ちっちちちと舌打ちして、司耀は目の前で人差し指を振ってみせる。

「それ間違ってるよ翠、翠がトラブルに巻き込まれるんじゃない」

「じゃあ、なに？」

司耀は満面の笑みで答えた。

「翠がトラブルを巻き込むんだ」

「しゅ〜」

睨み付ける表情が可愛くて司耀は目を細める。

「事実だろ」

「もうっ。司耀のバカ」

「俺にバカなんて言うの、翠くらいだよ」

司耀はくすくすと心底愉しげに笑う。

次代の宰相と自他共に認める青年は、その愛情表現がほんのちよつと屈折していた。

「公、そろそろ『央都』が見えますよ。甲板に出てみませんか」

『央都』の王室御用船であるクイーン・ティターニア号の船長である相可嘉月は、遊戯室の一角でしきりとペンを走らせる少年に声をかけた。

王族に特有の黒髪と黒瞳を持つ少年は、その名を東央宮とうおうぐう 戒かいという。彼の東王宮という姓は、姓であり、かつまた彼個人をさす名でもある。戒というのは、字名にすぎない。

央都の民は、必ず真名と字名を持ち、真名は特別な相手にしか教えないというしきたりを今も大切に守っている。これは、古代の魔導帝国の慣わしの名残であるという。

特に、貴族ともなれば名は特別な意味を持つ。

そして、彼の名は中でも更に特別だった。

……東王宮 戒は、央都において、皇に次ぐ地位にある大貴族であるからして。

だが、海の上においては貴族も平民もない。その自然の脅威は誰にでも平等だったから、海の男達は身分を鼻にかける人間を極度に嫌う。

少年が船に乗り込んできた当初のいかにも貴族的な……どことなく高慢さが鼻につくその口調と態度は、船員達の間であまり評判が良くなかった。

だが、三日もすればそれが誤解だという事がすぐに明らかになった。大公と呼ばれ、使節団の代表、女王の名代であろうとも、その素顔はたった18歳の少年に過ぎない。

極度の緊張と人見知りの枠を取り払ってしまえば、その素顔は、少し神経質ではあるものの負けん気が強く根が素直。極めて人好きす

る性質の少年だったから、船員達はあつという間に彼を気に入った。

少年……戒自身も船の生活がそれなりに気に入ったのだろう。

東王宮という央都においては、皇に次ぐ格を持つ身分にありながら、船員や水夫達と共に食事をするようになり、また、同じ物を嬉しそうに食べるものだから、乗組員たちはますます彼に対する好意を深めた。

船長自身もちろんそれが嬉しくないはずがなかったから、こうして折に触れ、戒の船上での生活が退屈しないよう心を配っていた。

「そうか。行こう」

案の定、船長に誘われて戒は目を輝かせる。

半年ぶりの帰国だった。

出航は春の終わりだったが、季節はもう冬になろうとしている。見るもの聞くものすべてが珍しく楽しい外遊ではあったが、やはり寂しかったのも事実だ。

これほど長く国を離れた事も初めてだったが、何よりも物心ついてからというものこれほど長く翠と離れたことは初めてだった。

それは時間的なことでも、物理的な距離でも同様だ。

それほどに戒は翠といつも一緒だった。

だが、それももう終わるのだと思うと、心が弾んだ。

船での生活は思っていた以上に快適で、素晴らしいものだった。

これまで文字の上でしか知らなかったさまざまなことを学び、船員や水夫達からいろいろなことを教わった。

戒には、一緒にこの外遊を過ごした彼らに対する連帯感のようなものすら芽生えているくらいだ。

それでもやはり、翠の側に戻ることは、嬉しかった。

「……いい天気だな」

甲板に出ると、戒は大きく伸びをする。

ここ数日、小雨のぱらつく日が続いていたので報告書の作成ばかりしていた。戒は事務仕事が嫌いではないが、やはりこう何日も続くと身体が鈍ってくる。

「しばらくは秋晴れが続くでしょう」

甲板では休憩中の船員達が思い思いにくつろいでいる。戒と相可を見ると、皆が軽い敬礼をする、戒はそれに目礼を返すに留める。

「あれが『央都』です」

デッキから船長の指差す方向を見れば、小さな米粒ほどの点が見えた。

「あんな小さな島が『央都』なのか？」

あまりの小ささに戒は驚きにも似た嘆息を漏らす。

「そうです」

「あんなに小さいのに、よく『央都』だとわかるな」

『皇』ではなくとも王族の一員である戒には魔力がある。

常人とは違う視界を有する彼にはそれが確かに『央都』だということを確認できるが、魔力も持たない普通人である彼らになぜそれがわかるのか不思議だった。

「船乗りが『央都』の影を見間違えるはずがありません」

にやりと船長が笑うと、左頬を抉る大きな傷が歪んだ。

最初は恐ろしくて正視することができなかった戒だったが、今ではまるで平気になっている。

慣れたと言えば慣れたのだが、軍人にとって戦いの中で得た傷は勲章だと聞かされればそれも道理と納得がいく。

何よりも、海の男達は気性が荒くとも、皆、さっぱりして気持ちの

いい人間が多かった。

「なぜだ？」

「どこの国で生まれようと船乗りの故郷は『央都』ですから」

自信たっぷりと言い切る船長の言葉に、デッキを掃除しながら彼らの話を聞いていた船員達が小さくうなづいている。

「……そうか」

戒は何となく嬉しくなっただけかな笑みを漏らす。

翠に教えたらしきと翠もおんなじように笑うだろうと思った。

「世界中を回りましたが、船乗りは結局、皆『央都』に帰る……。

いえ、別に公にゴマをするつもりはないですがね。央宮で老後を暮らすつてのは、船乗りの最後の夢ですから」

「へえ……船長もそうなのか？」

「勿論ですとも。退職したら、公の別邸の管理人にでもしてもらいたいですな」

眞埜港を有する商業都市・雁弥には『央都』のほとんどの貴族が別邸を構えている。

この半分が海の上に浮かんでいる都市の主要な交通手段は平底舟ゴンドラで、この船頭には老齢や何らかの理由で航海ができなくなった船乗りになることが多く、老いたりとも言えども血気盛んなそれらの船乗り達を束ねるために海軍を退官した者が管理人になることが多かった。

「船長なら、うちの別邸じゃなくて離宮から誘いが来るんじゃないか？万が一、離宮に勤めないならぜひ頼む。まあ、あと30年はさきだろうけど……」

まんざら冗談でもない気持ちの戒は、はにかんだ笑顔を見せた。

自分の軽口に真面目に応じる戒の素直さが微笑ましく、同時にその答えが嬉しくもあり、船長は笑みを漏らす。

「あと二日もすれば帰国できますよ」

「……あと二日か……」

戒は嬉しそうに笑った。

しかし、その笑顔が不意に曇りを帯びる。

「どうかしましたか？」

何かに気をとられたような表情だった。

「いや、風精達が騒いでいて……」

船長は、戒の持つ魔力の存在を改めて思い出す。

魔力のある人間は『央都』ではそれほど珍しくない。正式に訓練して磨かない限り、日常生活ではちょっとカンが良い程度でしかない。だが、戒は正規の教育を受け、かつ女王である翠を除けば最も強い魔力を持っている。

「嵐ですか？」

今回の航海は、台風シーズンの真っ只中。王家の御用船が沈むことはないとは知ってはいても、それなりの覚悟はしていた。

だが、風精と意思を交わす戒から前もって嵐の到来を告げられれば避けることもでき、その対処もスムーズにできる。

なるほど、聖王家に連なる一族とはこういうものなのかと彼らは一様に認識を改めたほどだ。

「いや、海の上に人が漂っていると……」

「人？ 生きていますか？」

「……わからない。ほんの少し先だそうだ。救助できるか？」

「もちろんです」

船長は力強くうなづいた。

漂流者の救助は船乗りの義務だった。

3

王宮で、彼のひねくれた幼馴染が彼の噂をしていた頃、刀箭^{トウヤ} 須佐^{スサ}は、雁弥の中心街を少し外れた海岸に居た。

元々、根っからアクティブにできている青年だ。宮殿にこもっているよりも外に出ていたほうがいきいきしている。

「で、その不審船ってのは、あれか？」

「はい。あれです」

付近の集落の長らしい住民が、船を指し示す。

三日前から停泊したまま動かないというその帆船は、一見した所、特に航行できないほど破損しているようには見えない。

「どうです？ 団長」

「危険はなさそうだけどさ……」

傍らの副官……麻賀^{オガ}に須佐は手にしていた望遠鏡を渡す。

須佐が騎士団長を拝命した時につけられたこの副官は目が悪い。

須佐には肉眼でもはっきりくっきり見えている船影が確認できないのだから相当だ。

「なさそうだけど、何なんです？」

「人が乗ってないみたいなんだけど……」

「はあ？」

麻賀は小さく首を傾げる。

「普通、最低でも見張りはあるだろう？ こんな天気の良い日にデッキに一人もいないなんて異常じゃなか」

「そりゃあ、そうです」

「まあ、いいや……とりあえず、様子見に行こうぜ。小船出させろよ」

「危険です。伝染病かも……」

伝染病で船員が全員立ち上がれない状態で、風の向くまま船が航行しているということも有りえないことではない。

「一応、黄色い旗は立ってないだろ。まあ、そんなに心配なら俺だけで行って来るけど……」

船内で伝染病が発生した際は、黄色い旗をたてるのが万国共通のルールだ。

「そんなことできるわけじゃないですかっ」

海賊討伐の際に須佐に生命を助けられたと言うこの麻賀は、心底、須佐に敬服している。

いざという時にはいつだって己が身を盾にするくらいの覚悟はできていた。須佐にそんな危険な事をさせるくらいだったら自分が行く方がまだマシだ。

「大丈夫だって、もしも……もしもだぞ、例えおまえの言うとおり伝染病でも、俺だけは絶対に大丈夫だって」

「その無意味に強気な自信はどっから来るんですか」
麻賀は呆れたような表情で小さく溜息をつく。

先日25歳の誕生日を迎えたという彼の上官は、きちんと宮廷作法にのっとった騎士団長を演じることもできるのだが、そうでない時はガキ大将そのものである。

「だって、俺は、「皇」の女王のモノだからな」

その瞬間の、須佐の表情をどう言ったら良かっただろう。
誇りと自信と……そして、妬ましいほどの歓喜の入り混じった不思議

議な笑みを浮かべて、まっすぐとその薄茶色の瞳が彼を見る。麻賀はそのまっすぐさと、その眼差しの強さとに圧倒された。

「その俺が、たかが伝染病なんかにやられるかっての」
いっそ小気味よいくらいのはつきりとした言い切りだった。

この国で、「皇」のモノという言葉には特別な意味がある。

『央都』を統べる王家は、他国の民から「聖王家」あるいは「神に愛されし一族」と言われている。

古詩によれば、「皇」の始祖はこの蓬萊を創造した「名を秘し最初の神」の末裔だと言う。

それゆえ「名を秘し最初の神」は「皇」の血を愛し、「皇」を守護する。

この『央都』が三千年の平和を貪るのも、この国が「皇」のモノだからだ。

「……そうかもしれませんね」

麻賀は何となく納得させられる。

「皇」の恩恵を最も間近で受けている『央都』の民の自らの王家に對するその尊崇は、はつきりいって信仰の域に達していると言っても良いほどだ。

「そうそう。それがわかったらレッツ・ゴー」

別に確証があるわけではなかったし、「皇」を守護するという神の存在を信じているわけでもない。

ただ、須佐は翠の命令が自分を危険に晒すはずがないことを知っていた。

それは理性とか、何らかの考察の結果というわけではなく、本能で。

それに、万が一、何かがあったとしても翠の命令で死ぬのならばそれはそれで本望だ。

(……何たって、惚れた女の為に死ぬのは騎士の最大の名誉だもんな)

騎士に叙勲されると同時に、須佐は翠にその剣を捧げている。

剣の誓いは生命の誓いだ。須佐は翠の為に生き、翠の為に死ぬ。

それは「女王」の為ではなく「翠」の為だ。

須佐はそれが許されている数少ない一人だった。

「……わかりました」

あまりにもあっけらかんとした須佐の様子に深刻に考えるのがバカバカしくもなったのか、麻賀は呆れたように肩を竦めた。

「……なあ、これってアルドバルラ号？」

須佐は、昔何かで聞いたことのある、同じ様な遭難事件をおこした船の名をあげる。

「はあ？」

「いやいやこっちの話……おい、そっちに誰かいたかー？」

「いませーん」

部下の声だけが返ってくる。

広い船内は人っ子一人いない。このクラスの船ならば最低でも50人の船員は必要だろうし、それ以外の同乗者もいたはずだが、その影も形も見当たらない。

「幽霊船って言うには傷んでねえし……幽霊出るほど古くなさそうだしな……」

帆は破れているものの航行に支障があるほどの大きな損傷は見当たらない。マストの色や舵の形、備え付けられている大砲の型からい

っても作られて3年はたっていないだろう最新型の船だ。

「海賊に襲われたわけでもなさそうです」

そして、戦闘のあったような痕跡もどこにもなかった。

だいたい、海賊に襲撃されたのなら積荷がまるごとそのまま残っているはずがなかったし、凶悪な賊ならば最後に火をかけていくだろう。

船長室らしい部屋に足を踏み入れた須佐はそのついさっきまで書いていましたとでもいいかげんな航海日誌を手を取った。

どうやら武蔵森船籍のこの公用船は、王室関係の荷を運んでいたらしい。

室内の様子は、さっきまでここに誰かいましたと言われても信じられるほどに雑然としてた。

飲みかけのワインボトル、無造作に投げ出されたシガレットケースにこぼれた灰……ただ、そこにいた人間だけがきれいさっぱり消失している。

「おい、海図とチャートと航海日誌……それから積荷の目録なんかの資料を一まとめにして王都に送るように手配しろ。離宮から魔法便で宮内長官宛な」

何がなんだかさっぱりわからないので、こういうのは土耀に押し付けようとしてすぐに決定した。

頭脳労働者を標榜するあの幼馴染ならば、嬉々としてこの謎に取り組むに違いない。

「はっ」

傍らの部下がすぐにその作業に取り掛かる。

「それから、この船、眞埜に曳航するよう手配しておいてくれ」
傍らの麻賀に依頼する。

一番近い港は科杜^{かと}だが、海軍の工廠がある科杜に他国の人間をいれることは憚られるし、いろいろな面を考えても『央都』最大の港である眞埜の方が都合がいい。

「修理はどうしますか？」

甲板に戻る須佐の2歩後ろを追いながら青年は問い掛ける。

「曳航に支障がなければ、なるべく手をつけないでおいてくれ。係官にそのままの状態に係留しておくよう言っとけ。それと、できれば、乗船者の名簿と船員の名簿があればそれも探しておいてくれるとありがたい」

「わかりました」

「じゃ、俺は戻るわ。他にも何かわかったら連絡くれな……とつと、あとさ、おまえ【海鹿堂】って知ってる？」

麻賀はこの雁弥の出身である。

「占い通りにある菓子屋のことですか？」

新しい菓子の開発に余念がない流行の菓子屋で、苺大福を最初に作ったのもこの店だった。

王都でもよく話題にのぼるのだが、残念ながら支店展開はしていない。

「そうそう。その場所教えて。土産買ってくから」

青年は手帳に簡単な地図を書いて渡した。

「さーんきゅー」

薄茶色の茶色の瞳に喜色が浮かぶ。

「……ああ、抹茶珈琲牛乳饅頭スーパーだけは止めた方が良いでしょう」

麻賀は思い出したように付け加える。

それは、海鹿堂の名高い名物の一つだ。

「……何だよ、それ」

軽やかに小船に乗り移ろうとした足取りがぴたりと止まる。
そのままの姿勢で、二人はしばし視線を交わした。

「……試してみてください。口では言い表せません」
「……………」

穏やかな晩秋の日差しが、二人の上に降り注いでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4186q/>

ローレライの呪歌（まがうた）

2011年2月3日14時08分発行